

業界 information

(有)東北グローイング

正会員

弊社は埼玉県本庄市が本社の(株)境野養鶏の子会社で、業務内容は採卵鶏のひよこから大雛まで育成をしている会社です。育成した大雛は主に北東北エリアの採卵養鶏農場へ納品、大変好評を頂いております。

設立は1989年(平成元年)で当初は(株)第一ポートリーファーム社(旧イチノウ=現フィードワン八戸販売の子会社)への大雛供給先としてイチノウ社からの要望のもとに農場設立しました。



1989年に旧倉石村に鶏舎3棟建設し、1993年には当時の青森県経済連から十和田市と金木町に所有していた農場を引き受け、生産販売も引き継ぎました。

その後2000年から2015年の間に12棟の新・改築を行い現在年間約230万羽の生産羽数です。

取扱い鶏種は白玉鶏がジュリア、ジュリアライト、マリア、赤玉鶏がボリスブラウン、ピンク卵がソニアとなっていて、このひよこは新潟県、岐阜県、茨城県、群馬県等の孵化場から導入しております。今年前半までは岩手県からも導入していましたが同県の会社が事業停止によりなくなりました。

境野養鶏グループは東日本エリアを中心に30ヶ所を超える大規模農場を分散配置し防疫対策上「オールイン・オールアウト方式」を採用し、農場の全鶏舎に水洗と消毒を行う為の空舎期間を設けることにより、衛生的かつ万全な環境で新しい雛を受け入れるシステムです。

そして生産者の求めるオーダーメイドであり独自のワケチ

ネーションプログラムに基づき、鶏の能力・性能等を把握し、きめ細かい生産管理を行っております。

常に生産者の立場に立って健康で良質な採卵用ヒナの安定供給を心がけております。

従って東北グローイングもグループの一員として、親会社の方針に基づく生産を行っております。

当業界も毎年鳥インフルエンザ感染の恐怖に悩まされておりますが、数年前から弊社では鶏舎で発症する経緯から何らかの要因でウィルスが舎内に入り込んで感染するのはとの推察から①一頃言われていた渡り鳥は我々農場敷地内には絶対来ないしましてや舎内には絶対入らない②農場内に飛来してくるのはカラス・スズメであるがこれも舎内に入ることはまず無い③舎内に入るのはネズミ・イタチ等の野生動物④同じく舎内に入出入りするの従業員である。との断定から、農場内にカラスの飛来防止対策(諸々の機材を使用)、鶏舎に野生動物進入可能性個所の徹底対策と従業員の鶏舎出入りに関し内外の長靴履き替え徹底と履き替え方法の厳守をいち早く行いました。これらの事に毎年改善を加えインフルエンザ感染防止対策を行っております。

3年前から当会員でもある(株)青森ポートリーも境野養鶏グループに加わりましたので両社で総力を挙げて当地の養鶏業界の発展に貢献してまいります。



今後の予定

10月15日(火)
● 会員親睦ゴルフ会

10月20日(日)
● こども料理教室
(八戸ポータルミュージアムはっち)

11月15日(金)
● 第6回畜産グルメパーティ
(八戸プラザホテル)

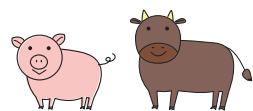
2月
● 講演会及び新年懇親会



事務局だより

このたびの能登半島豪雨で被害に遭われました方々に心よりお見舞い申し上げます。元日に発生した震災の復旧復興も進まないうちの再びの被災で、今後の生活再建の遅れが懸念されます。最近の気候変化によりこのような自然災害が全国各地でも起こりうる状況になってきており他人ごとではないと思われます。

さて、長かった夏もようやく過ぎ去り秋らしくなりました。収穫の季節を迎えているいろいろな食のイベントが行われる中、当協会では青森県産畜産物を使った「こども料理教室」や「畜産グルメパーティ」などを開催します。食欲の秋を楽しみましょう！



業界の枠をこえ、地域に根付いた活動を目指して

Linkage

リンケージ

(一社)青森県畜産・飼料コンビナート振興協会 PR情報誌



vol. 15

(2024 年 10 月発行)

< 発行 >
一般社団法人
青森県畜産・飼料コンビナート振興協会
〒039-1164 八戸市下長二丁目2-24
下長第4オフィス2階7号室
TEL:0178-51-8868 FAX:0178-51-8876
WEB:https://linkage-aomori.jp/

< 編集 >
総務委員会

百年企業を目指して

三八五流通株式会社 代表取締役社長 泉山 元



弊社には畜産関係の顧客がおられます。取扱量も年々増加傾向にあり、大変ありがたい存在で感謝に堪えません。家畜の飼料は、もちろん八戸港臨海部の飼料穀物コンビナートで生産されたものとお聞きしております。ここに改めまして青森県畜産・飼料コンビナート振興協会の皆さまに心からの感謝の意を表する次第であります。

三八五流通は、1947年の創業以来「人の和」を社是として、輸送サービスで地域社会とともに発展してきました。おかげさまで、2024年に創業七十七年を迎えることができました。ロジスティクス部門20社、ホテル・観光部門15社、建設部門3社、サポート部門2社の合計40社でグループを構成しております。全体の売り上げは約320億円。社員数は約3100人、車両保有台数は約1800台であります。

また、「日経MJ」売上高ランキング2023において、引越部門で三八五流通が東北第一位、旅行部門で三八五観光が東北第二位、タクシー部門にて三八五交通が東北第一位となりましたほか、三八五バスが「プロが選ぶ優良観光バス30選」に二十一年連続で選ばれており、規模の割にはよくやっているとの評価もいただいております。

さて、日本人の食生活は戦後の高度経済成長や国際貿易の進展に伴い多様化し、米や魚などの食材から肉や乳製品などの畜産物や加工品へと消費が大きく変化してきました。今後も肉や乳製品などへの需要が高まることが予想されておりますが、畜産産出額ランキングトップ3は日本の北端と南端にある北海道、鹿児島、宮崎の三道県で全体の約半分を占めておりました。一方で地球温暖化の進行で家畜への過酷な環境は生産性の低下をもたらしている状況にもあります。

八戸飼料穀物コンビナートが完成したのは1981年のことでした。アメリカミシシッピ川流域から主原料となるトウモロコシをパナマ運河経由で5万トンの船で八戸港まで運び、背後地の飼

料工場群が副原料と調合し牛・豚・鶏などの飼料を生産するというプロジェクトです。八戸港は日本でも有数の北米に近い港であり、コスト面で優位であったこと、同時に先人たちの長年にわたる港湾修築事業で5万トンの船が係留できるー13Mの岸壁を有していたことが飼料穀物コンビナート実現の大きな決め手となりました。因みにパナマ運河から八戸港へは鹿児島県志布志港より約一日早く着くことでお分かりいただけると思います。

三八五流通の経営目標に、「コンプライアンス」「進取」「信用」「人材育成」を掲げております。コンプライアンスの徹底は輸送品質の向上に繋がり、品質が良ければお客様に使っていただける。既存顧客の拡大と新規顧客の開拓につながると考えています。また、無から有を生み出すためには「信用」が大事であり、「無+信用=有」でありますように、自然科学ではゼロに幾ら数字を掛けてもゼロですが、人間社会では無から有が生まれるのです。そのカギとなるのが「信用(品質)」であり、信用を下げることは簡単ですが蓄積することは難しいことだと思っております。

八戸飼料穀物コンビナートでは、現在年間200万トンを超える飼料を生産していると同いました。北東北三県は冷涼な気候で畜産に適したところですが、この地域に供給し四十年余が経過したのであります。今では八戸にとり無くてはならない存在となりましたが、この間畜産農家、企業との間には確たる品質が保証されていたからこそ、生産量が年々増加し続けてきたのではないかと考えております。業種は異なるものの、企業としてのコンプライアンス・信用の重要性につきまして改めて強く感じた次第であります。こうした想いを「百年企業」の実現に向けこれまで以上に強力に取り組み畜産業をはじめとする地域社会に貢献してまいります。

最後になりますが、貴協会のますますのご発展と会員の皆さま方のご健勝を心よりご祈念申し上げます。

青森県の畜産振興と家畜防疫への取組



青森県
農林水産部畜産課長
田中 慎一

一般社団法人青森県畜産・飼料コンビナート振興協会及び会員の皆様には、日頃から本県の畜産振興に多大なる御協力を賜り、心より感謝を申し上げます。

本県の畜産は、令和4年における県全体の農業産出額3,168億円のうち畜産産出額が979億円と、約3割を占める重要な基幹産業です。この産業を維持・発展させるため、欠かせないのが家畜防疫であり、家畜の健康を守り、家畜伝染病の予防・まん延の防止を図ることは、畜産経営の維持のみならず、畜産物の安定供給や消費者の信頼確保にもつながります。

家畜伝染病の発生状況についてですが、高病原性鳥インフルエンザでは、令和4年度シーズンは本県を含む26道県84事例が発生し、約1,771万羽が殺処分対象となる過去最悪の状況でした。昨年11月からの令和5年度シーズンでは、本県での発生はなかったものの、10道県11事例が発生し、約85万6千羽が殺処分対象となりました。現在も世界的にみれば野鳥等での発生が継続していることから、次シーズンに向けた警戒を強めていく必要があります。

豚熱については、これまで本県での発生はありませんが、国内では昨年度に4事例、今年度は3事例が発生しています。県では昨年度「青森県豚熱経口ワクチン対策協議会」を設立し、野生イノシシへの経口ワクチン散布を実施しているところですが、本年8月に本県でも野生イノシシにおいて豚熱の感染が確認されており、飼養豚での発生リスクが最大限に高まっている状況です。

また、日本に最も近い韓国を始め、アジア諸国で発生が確認されているアフリカ豚熱や口蹄疫などは、万が一国内へ侵入した場合に地域経済に甚大な被害をもたらすことから、水際対策が重要となっており、県ではこれまで、県内4か所の空港や海

港で航空機・クルーズ船の寄港に合わせた乗客の靴底消毒を徹底しているところです。

このような中、県では本年度から、新たな県政運営の基本方針「青森県基本計画『青森新時代』への架け橋」をスタートし、本県の目指す姿の一つとして「農林水産業が持続的に発展する社会」を掲げ、アクションプランである「青森新時代『農林水産力』強化パッケージ」に基づき、所得向上にこだわった施策を積極的に展開していくこととしています。

家畜衛生分野においては、「畜産を守る家畜衛生対策の推進」を重点的なプロジェクトとして、生産者の主体的な飼養衛生管理基準の遵守による家畜伝染病の発生予防や、官民の連携強化による迅速かつ円滑な防疫体制の確立を目指していきます。貴協会におかれましては、青森県養鶏協会との共催により、高病原性鳥インフルエンザ防疫対策の研修会を開催するなど、生産者の主体的な活動を推進していることに深く敬意を表します。県でも、関係者の皆様との対話を進めながら、オンラインを活用した飼養衛生管理基準の遵守指導や、防疫措置におけるアウトソーシングなど民間事業者等との連携を図り、防疫対策の強化を図っていくこととしていますので、引き続き皆様の御協力をお願いします。

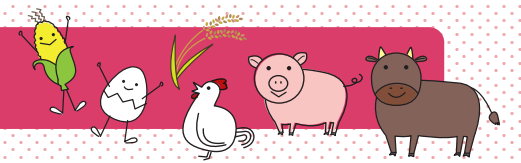
また、本県の畜産業が持続的に発展するためには、担い手の確保も重要となることから、県では、貴協会の全面的な御協力により、小中学生や農業高校生の畜産施設見学会を実施しており、本県畜産業の認知度向上や就労に向けたきっかけづくりにも貢献いただいていることに、改めて感謝申し上げます。



現在、畜産業は飼料・資材価格の高騰等により、非常に厳しい局面を迎えています。県では、家畜の生産性向上や自給飼料の増産、耕畜連携体制の強化など、多方面からの対策を実施しており、今後も、生産者が豊かさを実現できる力強い畜産業を実現するため、生産者をはじめ貴協会とも対話を重ねながら、関係者が一丸となって畜産行政に取り組んでいきたいと考えておりますので、これからも皆様の御理解と御協力を賜りますようよろしくお願いします。



Pick Up NEWS



施設見学会

プライフーズ（株）

7月9日、青森県立三本木農業恵拓高等学校と青森県営農科大学校の生徒学生38名が、プライフーズ㈱細谷工場・細谷プロセスセンター（三沢市）を見学、食鳥の生産処理から鶏肉の製造出荷、鶏肉加工食品の製造までを学習しました。最新鋭大規模施設の見学は昨年続く企画で、生徒たちは地域の畜産の認識を新たに先進的産業としての理解を深めました。



鶏肉処理を見学する生徒たち

(有) 東北ファーム

7月23日、会員向け畜産施設見学会を開催、会員等24名が東北でトップクラスの大規模農場で鶏卵の生産販売を行う㈱東北ファーム（三沢市）を見学しました。また、高病原性鳥インフルエンザ防疫対策として、全国に先駆けて導入された農場分割管理の取り組みについてもレクチャーを受け非常に有意義な見学会となりました。



見学通路から各工程を見学します



総合 GP センター前で

鳥インフルエンザ防疫対策研修会



9月4日、青森県養鶏協会と共催で「令和6年度高病原性鳥インフルエンザ防疫対策研修会」を開催、発生リスクが高まるシーズンを前に養鶏農場管理者を主対象とし、青森県の協力を得て、リモート通信システムを活用した飼養管理・指導の実証や、防疫対策の事例発表が行われました。

養鶏農場と会場出席者がリモートで衛生管理と防疫対策を共有しました。